女性登山指導者の養成に関しての展望

高　野　由美子（同人コスモス）

１．登山者と指導者の現状

近年の日本百名山ブームや山ガールブームにより、いろいろな人が登山をしているのが見受けられるようになった。総務省統計局の平成23年の調査では、15歳以上の「登山・ハイキング」の行動者は972万７千人で、男性は494万５千人、女性は478万２千人となっており、女性登山者数は全体の半数近くになっている。年齢別では40歳後半以上が多く、５歳階級別にみると男性では65～69歳が最も多く、次に60～64歳であり、女性では60～64歳が最も多く、次に55～59歳となっている。相変わらず、中高年登山者が多いのが現状である。

登山指導者の公的な資格としては、公益財団法人日本体育協会公認スポーツ指導者制度がある。登録者は、平成29年10月１日現在、2,009名（指導員：905名、上級指導員：987名、コーチ：52名、上級コーチ：65名）となっている。男女別の指導者数は公表されていないが、指導員研修会への参加者数等から推測すると、おおよそ２割程度と思われる。これは、他の競技スポーツとほぼ同程度の割合である。

２．なぜ女性指導者が増えないのか？

男性指導者の指導力の高さやネットワークの広さが高く評価され、指導者は男性が良いという意見がある一方、女性指導者は、女性特有の母性的なものが評価され、コミュニケーションが取りやすいこと、また女性特有の身体のことや感情的・生理的な精神面の悩みは同姓にしかできないなどの、女性指導者を必要とする声は多い。しかし、依然として指導者は圧倒的に男性が多い。これは、スポーツ全般に言えることだ。

女性指導者が増えない理由として、次の様なことが考えられる。

（１）スポーツの指導者の世界も一般社会の構造と同様に「男性社会」である

日本の各スポーツ組織の女性役員の比率は、ようやく１割程度になったが、日本山岳・スポーツクライミング協会ではいまだに皆無である。傘下の各都道府県山岳連盟（協会）でも１～２割程度と推測する。このような状態では、女性の意見が反映されにくく、価値観が一元的になってしまうと言われている。女性の起用は多様性を生み、そこから新しい価値観が生まれるのではないだろうか。

最近ではあらゆる場面で女性の登用が促されている。登山界も女性が活躍するようになることを期待したい。

（２）女性特有の結婚・出産・育児といったライフイベントで多忙である

登山者として最も充実している時期とライフイベントの時期が重なるため、自身のライフイベントを優先することになる。就職を機に登山から離れてしまう人もいる。結婚しても登山を続けている人は見かけるが、子育てしながら登山を続けるには、パートナーや家族をはじめ周囲の理解と協力が必要であり、かなりハードルが高くなると思われる。子供をもつ女性は、どんなに周囲の協力があっても女性しか成し得な

いことがあるため、一時的に登山を中断せざるを得ないのが現実だろう。最近では仕事を持つ女性も増えている。仕事と育児の両立だけでも、社会全体で問題となっている現状では、難しい課題だと思う。

私の知人で、女性だけでヒマラヤを目指していた人がいたが、結婚、出産のため、志半ばで中断せざるをえなくなった。復帰してぜひ実現してもらいたいものだ。

（3）男性指導者にしか教わったことがない女性が多く、ロールモデルが少ない

周囲の山岳会をみても、リーダーは男性が多く、男性に指導されている人が多いと思う。

以前、社会人山岳会に所属する研修生から、「自分の周りには女性の指導者がいない。女性が指導者として活動できるとは思わなかった」と言われたことがあった。私は本格的に登山を始めたのは、男子のみの山岳会であったが、二人の指導者と出会ったことで、登山人生が変わった。二人とも長年登山研修所で講師をされていたので、指導に熱心で指導することの大切さを教えられ、指導者になることを勧められた。当初、迷いもあったが、背中を押されて指導者となり、後に登山研修所の講師をさせていただくことになった。私は、恵まれた環境だったので、周りに女性指導者がいなくても、ごく自然な形で指導者になったと思う。

（4）女性自身が積極的に指導者になることを望んでいない

男性中心の社会で、女性はリーダーシップをとることが少ない環境で育ってきた。従って、男性に依存する女性が多く、男性にも常に上位でいたいという支配欲があると考えられる。すなわち、頼りたい女性と頼られたい男性の相互依存という関係の中で育った女性は、男性に任せておけばいいと、積極的に指導者になろうとしなくなったのではないだろうか。もちろん、自立している女性もいるし、女性の自立心を育成する指導を行っている男性指導者もいる。私は正しくそういった指導をされてきたのだと思う。

また、自身の登山やライフイベントを優先するために、指導者になることに関心をしめさないことも考えられる。多忙な中で指導に時間を割くことは大変なことだ。だから、できるだけ関わろうとしなくなったと見受けられる。

3．女性登山指導者の養成について

スポーツクライミングが東京オリンピックの正式競技となったことにより、人気が高まっている。これから、若い人達はスポーツクライミングから登山を始める人が増えてくるのではないだろうか。そうなれば、ますます指導者が必要となり、女性の指導者の増加が望まれるだろう。前述のように女性の指導者が増えない大きな要因は、社会的な問題だけでなく、女性自身の問題が大きいと考える。すなわち、女性の意識を変えなければならない。若い世代の女性指導者を養成するためには、課題は多い。

登山の指導者が他の競技スポーツの指導者と異なるのは、競技スポーツでは現役を引退して指導者になるのに対して、登山は登山活動の中で指導する必要があるため、現役の登山者であることである。また、レベルの高い指導を行い、指導の現場であらゆる場面に対処するためには、精鋭的に登山を行い、登山経験が豊富であることが重要だと考える。若い年代は一番多忙な年代である。それでも指導に関心を持ってもらうには、指導の重要性を理解してもらい、指導することで得られる学びや良き出会いがあ

ることを伝えることが必要だと思う。そして、指導することは自身の登山にプラスになることを説くことが大切である。女性は、自分の限界を超えようとしない人が多いが、自身の登山のレベルアップを図り、視野を広げるためにも、指導者を目指して欲しいと思う。そのためには、周囲が背中を押してあげる必要があるだろう。

そして、女性にチームのリーダーを任せ、指導者として活躍できる機会を与えることが必要であると考える。機会を与えられた女性は、そのチャンスをぜひ生かして欲しい。しかし、最初はどのようにしていいかわからないことが多いだろう。その際は、ベテランの指導者がサポートする体制作りが必要と思われる。私も周囲に助けられて成長できた。経験を積み重ねることで、自分の登山観に従った指導ができるようになるだろう。そして、従来の概念にとらわれることなく、女性目線の新しい発想で指導ができるのではないか。

そして、レベルの高い指導をするためには、指導者は常に勉強して資質を向上する必要がある。登山研修所が実施する研修会は、指導者のための研修会であるので、ぜひ参加して欲しい。ここでは、防御の技術を中心に理論に裏付けされた技術が学べる。指導者にとって、登山研修所の果たす役割は大きい。しかしながら、理論や数字が不得手な女性は少なくない。かつて私は、指導の際は感覚だけでは相手に伝わりにくいので、数字で示せと教えられたが、なかなかできなかった。だが、私は登山技術勉強会（注1）で学ぶ機会があったことで、なんとか苦手意識を払拭できた。だから、毛嫌いすることなく取り組んでもらいたい。

また、費用と時間がかかるが、スポーツ指導員の資格を取得することを一考されたい。資格がなくても優秀な指導者は多い。だから、資格ありきではないが、ここで学べる運動生理学、心理学、医学、栄養学等は、科学的にトレーニングや登山を行うためにも、必要な知識である。ぜひ挑戦して欲しい。

私は登山の指導において、男女の性差はあまり関係がないと思う。しかし、女性指導者が、女性登山者に与える影響は大きいと考える。女性指導者が増加すれば、その背中を見て育つ女性指導者も増えるだろう。多くの女性指導者が活躍することを期待したい。そうなれば、その中から登山研修所の講師を務める人材が多数輩出されるのではないだろうか。

（注1）松本憲親氏を中心にクライマー有志で、月一回開催している。

参考文献

「登山・ハイキングの状況」総務省統計局統計トピックスNo.96　平成28年８月10日発行

「Sports　Japan　vol.34　2017 11-12」公益財団法人日本体育協会　平成29年11月10日発行

「女性スポーツ指導者が女性選手にもたらす影響」市川美香著　http:// www:libir-bw.bss.ac.jp

「女性競技者の抱える問題と女性指導者増加のための具体的方策」男女共同参画委員会金谷麻理子著　https://www:jstage.go.jp

「スポーツ女性指導者、なぜ増えない　山口香さんの見方は」朝日新聞大阪本社版　平成29年３月８日

「朝日新聞2020シンポジウム 女性とスポーツ」朝日新聞大阪本社版　平成29年11月25日